# ぼくの平和を取りもどせ

国府小・４　大林　悠人

ぼくには、四才の妹がいる。妹は、いつもぼくの物を何でも使いたがって、ぼくからうばおうとする。この間、ぼくが自分の部屋で遊んでいたときもそうだった。妹は、ぼくが使っていたおもちゃを取った。

「みいちゃんもやりたい。」

ぼくは、

「あ、今いいところなのに。じゃませんでよ。」

とさけんで、すばやくおもちゃをうばい返した。

「よし、これでまた遊べるぞ。」

そうしたら、妹が大声で泣き出した。ぼくは、うるさいなと耳をふさいだ。すると、妹はもっと大声で泣き出した。

「みいちゃん、どうしたの。」

お父さんが来た。これはまずいてん開だ。

「妹を泣かせるな。お兄ちゃんなんだから、かしてあげなさい。」

結局、ぼくがおこられてしまった。なんでぼくがおこられないといけないんだ。妹ばっかり守られてずるいよ。ぼくは、くやしくて妹をにらみつけた。

いつもこんなふうに妹とけんかになって、ぼくも妹もいやな気持ちになる。このままじゃあだめだ。それでぼくは、けんかをせずにすむ方法を考えることにした。妹がぼくの部屋に入れないようにすればいいんだ。

まず、ドアのところに『立ち入りきんし』と書いたかん板を付けた。けれど妹は、ふつうに部屋に入ってきた。妹はまだ字が読めないんだった。それで、ぼくはあわてて、

「これを見て。『立ち入りきんし』って書いてあるところには入っちゃいけないんだよ。」

と説明した。だけど妹には意味が分からないらしい。この作戦は失敗だ。

次に、部屋に入れないように、ドアのところに物を置いて開かないようにした。妹がドアをガチャガチャやってさけんだ。

「開かないよ。お兄ちゃん何してるの、早く開けてよ。」

少ししてあきらめたのか、シーンと静かになった。よし、うまくいったぞ。ところが妹は、なんと、お父さんを連れてきたのだ。お父さんを使うなんて反そくだぞ。お父さんは、あっさりドアを開けてしまった。また同じことのくり返しだ、とぼくはがっくりした。

なにかもっといい方法はないかな。ぼくは、うーんとうなりながら考えた。そのとき、ぼくのつくえの引き出しに入っているシールのことを思い出した。妹はシールはりの遊びが大好きだから、これをあげれば気をそらすことができるかもしれない。それで、次に妹が部屋に来たときに、シールと、ついでにぬり絵もあげてみた。すると妹は、

「シールだ。やったあ。」

と言って、シールやぬり絵にむちゅうになってどこかへ行ってしまった。うまくいった。ぼくは、うれしくなって鼻歌を歌った。作戦成功。ぼくはにこにこ。妹もにこにこ。平和な時間がおとずれた。

ぼくは、『北風と太陽』のイソップ童話を思い出した。北風は、無理やり旅人のマントをぬがせようとして失敗した。けれども太陽は、旅人が自分からマントをぬぐようにしかけて成功した。

ぼくの作戦も、妹に無理やり部屋に入らせないようにしたら失敗した。だけど、妹が自分から他の物にきょう味をもつようにしたら成功した。相手の気持ちを考えたからうまくいったのだと思う。

そうは言っても、ぼくはいつも妹と遊びたくないわけではない。妹がきらいなわけではない。

妹といっしょにブロックで遊ぶときはすごく楽しい。ぼくはいつも、ブロックで大きな家を作る。すると妹は、

「お兄ちゃんすごい。これで遊びたい。」

と言って、目をかがやかせる。ぼくはうれしくなって、よし、次はもっとすごいのを作るぞ、とはり切る。ぼくは、こんなふうにすなおに喜んでくれる妹が好きだ。そんな妹と、これからも仲良くしていきたい。

ぼくは、けんかは好きではない。できればけんかはしたくない。でも、けんかになりそうなときは、相手の気持ちを考えるようにしたい。やっぱり、平和がいちばんだ。

３・９